

# 戸破の歴史を訪ねて

## 越中国尉水郡戸破村ノ事ナドゾのこ

戸破の地名については、その昔、早害で水不足になつたので、信州戸隠さんへ水乞いに行ったところ、ご利益があり、たちまち戸を破るような大雨になつたとか、また、一帯の泥沼の縁辺を田地割りした辺割に由来するとか、辺割は班田や条里制に由来するとか、いろいろ言われているがいずれも定かではない。

戸破村は中世には、京都加茂御祖神社（下鴨神社）領倉垣庄に含まれ、文明元年（一四六九）の某下知状に「倉垣庄之内戸破村」と見える。

江戸時代初期の戸破村は、針原、北手崎、末長、長面、高畑、島、（黒河道西側）などからなり、三ヶ村は、高寺、愛宕、水上などから成っていた。

万治元年（一六五八）、下条村瀬兵衛（十村・寺林家）が加賀藩へ申し出て、戸破村と三ヶ村との間の畑地や野毛地（すすきやかやなどの生えている荒蕪地）に小杉新町の町立て願いを出し、許されて小杉新町が出来た。

西は今の上新町から、東は鍛冶屋橋までで、次に町立てが整えられていった。

この時、北手崎の温井庄左衛門、同庄右衛門（いずれも温井久助の分家）などの高持百姓や大手崎村にあった久証寺も新町へ移った。

また、寛文二年（一六六二）には、小杉新町が北陸道の宿駅に指定され、温井屋庄左衛門が宿本陣（藩主が宿泊あるいは休息するところ）を勤め、寛文七年からは下条屋長左衛門がこれを勤めた。



手崎加茂社筋の通じるべ

天正十年（一五八二）神保氏張が手崎の町に、「たう町（中）いち如前々々（相立）あいたてへきの事」など、三力条から成る制札を下している。

また、慶長十年（一六〇五）「へわり村久助（村肝煎・温井氏の祖）」が藩主前田利長に手崎の市再興を請うて、利長が再興申付状を下付している。

手崎の加茂社前の分岐点に「右とやま 左いわせ」の道しるべがある。右は、西二保、願海寺、野町、吉作を経て分茶屋へ出る「とやま道」であり、左は鷲塚、大白石、下村（宿駅）を通過して東岩瀬へ出る、参勤交代で加賀藩主が通った旧北陸道の往還道である。

当時、手崎は交通、物資流通の要衝の地であり、市がたつたのも充分うなずける。

中田から水戸田、黒河、追分茶屋へぬける中田往来（三戸田道・以前の旧北陸道）の黒河は、長沢から飛州へも出る交通、物資流通の要衝であり、大手崎村は、この黒河ともつながり、まさに要衝の地であった。

（温井喜彦・富山県郷土史会会員）